

# 三重大学 海女研究センター だより



三重大学海女研究センター  
(三重大学人文学部総務担当)  
☎059-231-6991

## 記憶と会話からたどる 地域の個性

今回は主要事業であるアーカイブデータベース事業について、最新の成果と、継続するなかでの気づきをまとめてみます。海の博物館に所蔵される、漁業・漁村に関する写真や映像のデータベースを構築する事業で、成果はセンターのホームページで公開し、写真展として地元のみならずとも共有してきました。写真展は2019年度の国崎に始まり石鏡、波切、安乗と続き、成果は過去の連載でも紹介してきました。

展示するほか、地元にある古写真を収集してデータ化しています。

会場には当時を知るかただけでなく、その子どもや孫世代のかたがたもいらつしやいます。「懐かしい」の心算だけでなく、地元の歴史や文化を継承する場になっています。

例えばこの写真は、今年2月の安乗での写真展で地元から提供されたもので、浜に並ぶ竿にエビ網を干す様子です。「子どもの頃は学校帰りや夏休みに網の取り込みを手伝った」という一方、「化学繊維の網になって竿を使わなくなった」「浜が狭くなった」など、技術革新や環境変化によって浜との関わり方が変容してきたことが語られました。そんな小さな歴史の数々を「知らなかった」「そういうことか」と、若い力が線のようにつないでいく姿もありました。

また、地元でよく口にされる話題の個性にも気づいたり。漁村同士で共通する話題も多いですが、口にされる頻度や熱量でいえば、例えば国崎では

熨斗アワビをはじめとする伝統行事を受け継いできた誇りと苦勞、石鏡では浜の活気や海女の出稼ぎ、子ども時代の荒っぽい海水浴など。安乗では「安乗埼灯台前の中学校」で盛り上がりました。

年配のかたの思いを、若いかたが「地元らしさ」として町づくりに反映させようとする姿に、よく使われる「地域の個性を発見して活かす」という言葉の内実―地道で大変だけど温かいコミュニケーションの積み重ね―を垣間見た気がしました。そんなコミュニケーションの息遣いを残すため、最近、地域のかたがたへのインタビューを映像化する活動も始めました。ぜひご協力いただけるとうれしいです。



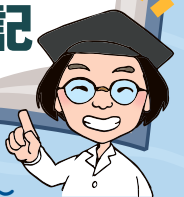
浜に干されたエビ網 (志摩市安乗)

## 鳥羽・海藻文化革命 岩尾博士の 海藻博物記

vol.30

～磯歩きの話～

水産研究所 ☎(25)3316



気候も良くなり、観光や散歩に海を眺めに海岸に行き、あまりの気持ちよさに腰まで浸かり遊んでしまいたくなる季節がやってきた。お勤めするのが、磯歩きである。磯歩きなんか、子どものころに十分やったというかたでも場所ごとに暮らしている生き物の種類や量が違っていること、ましてや生えていたり打ちあがっている海藻、海草に違いがあることなどに注目して歩いたかたは少ないのではないだろうか。そんなことを言われても生き物の名前はわからないし、面白くないし、知っても役に立たないしと思われるかもしれない。そんなことまず、インターネットなど



深さ(浅さ)によって生えていきり場所も異なる。



同じようにモジモジしているも枝わかれの合や大きさ、形などがさまざま。



ひとつの海藻でもねじれているが、枝や気胞や葉など部位で異なる。

で訪れる地域の潮見表を探し、日中に潮位が70cm以下に下がるような日を見つける。あとはその日に目星をつけた海岸に訪れるのだが、車で訪れる時は駐車場などが無いことが多いので、漁協の事務所などで目的を伝え、止めさせてもらえる場所などを教わるのが無難だろう。また、基本的には生えている海藻をむしり取ることは禁止されているが、ちぎれているものや打ちあがっているものは持ち帰って良い(海藻押し葉標本という美しいものを作ることができ)。干上がっている磯でも浅い位置にだけ生えている海藻(イシゲ、イロロ、フノリなど)やそれより少し下だが水には浸かっている場所にもいるもの(ヒジキ、アオサ、イワヒゲなど)、色も形も実に多種多様な海藻が見られる。ハオコゼやゴンズイなど毒針のある魚が紛れていることがあるので、勢いよく海藻の草むらや石の裏などに手を入れることは避けたほうが良い。波当たりの強そうな浜、穏やかな浜で生えている種類が違っているので比べてみるのも面白い。